

INTERVIEW：インタビュー

一般社団法人イマジン・ワンワールド
代表理事

高倉慶応さん

東京弁護士会の会議室に、颯爽と和装で登場された、一般社団法人イマジン・ワンワールド代表理事の高倉慶応さんの姿に、私たち聞き手の心は和みました。一方で、高倉さんが熱く語る、KIMONO PROJECT、日本伝統文化の世界への発信にける意気込みとチャレンジ精神に、終始圧倒されてしまいました。

（聞き手・構成：中村 千之，木村 容子）



——高倉さんのご経歴をお聞きかせください。

創業してから77期になる呉服屋の3代目です。

大学を卒業して銀行に就職したんですが、父が病で倒れたのをきっかけに、家業を継ぐ決心をしました。

——呉服屋さんを継ぐことに不安はなかったですか。

僕はロックが好きで、カルチャー的にもアメリカナイズされていましたし、自分自身が着物を着たことがほとんどありませんでしたので、帰ったところで何ができるんだと悩みました。ただ、親族も含めて沢山の人の生活を支えていた会社でもありましたから、使命感というか宿命に対する許容というものも頭の中にありました。

——銀行を退職されたのは、平成3年だから約25年前ですよ。その当時は、今やられているイマジン・ワンワールドのプロジェクトのようなことは思いもよらなかったのではありませんか。

僕は、もともと英語を使った仕事とか、海外事業、海外進出に興味があったんです。子供のころから外務省とか国連とか、外国に対する興味が強かったんですけど、最もそれに縁遠い仕事に行かなきゃいけないということは、当時の自分にとっては、人にはなかなか話しにくいぐらいのショックでした。でも、実は今になってみて、やっぱり自分の中ではつながっていたと思うことが多々あるんですね。その1つが「イマジン・ワンワールド」のプロジェクトです。

——「イマジン・ワンワールド」とは、どのような呼びかけなのですか。

大学卒業のとき、地球環境問題を卒論のテーマにしたんです。結局、答えは出せませんでしたけれども、やっぱり人間の欲をコントロールする以外に環境問題って解決できないと思うんですよ。楽になりたい、豊かになりたいばかりでなく、要は、「みんなのことを考えて（想像して）我慢しようぜ」というものがないと。経済成長という名の下に過度に膨張しよう

とするものにどうブレーキをかけるのかというところについて、何か思想が必要だと思い、「イマジン」というものを掲げました。きっと、「俺だって分かってる、でも、仕事だから仕方ない」と思っている人は多いでしょうから、個々の意識とかそういうものが重要になってくるんですね。

——「イマジン・ワンワールド」のプロジェクトにおいて、相手国の文様を着物に入れています、そのいきさつを詳しくお聞かせください。

相手国の文様を着物に入れるヒントとなったのは、1つは、皇室外交のお話です。訪問される相手国の伝統的な文様等を、ご自身の服装や持ち物にさりげなく取り込んでいくという話を聞いたことがあります。自分たちが今どういう気持ちで相手の国と向き合おうとしているのかということを、言葉ではない形で示そうとされたんだと思い、そのご姿勢に感銘を受けたのです。

もう1つは2013年の12月にパリで行った着物のショーです。

——パリの百貨店プランタンの最上階で開催されたそうですね。

どうせやるなら、一流のところを知りたいということで、最上階のブラッスリーを借りて行いました。僕の父や、運営している美術館がコレクションしていた着物を持って行ったほか、日本とフランスの友好の証しに、何か1つ僕も着物を作っていこうと思って、江戸時代の絵師である伊藤若冲のデザインに、1900年代のパリの当時のヨーロッパの美術様式としては最先端だったアール・ヌーヴォーを融合した着物を作って持って行きました。

1900年代の日本には立派な着物が既にある、当時の世界の中でも、最先端の染色技術でパリの万博に着物を出品したんだそうです。その生産者が今でも

日本に残っていて、当時のアール・ヌーヴォーを復刻させて着物に取り込んでフランスに持って行ったんですが、そういった歴史を説明すると、フランスの方々は、非常に敬意を払うんですね。フランスの人たちがここまで感激してくれるのであれば、これを世界中の国の人たちに、分け隔てなくやったら、面白いだろうと思いました。

——プロジェクトはどのように始められたのですか。

最初は本当に見切り発車で、とにかく最初は5枚作ろうということで、5カ国を五大陸から1つずつ選んで作りました。

——ちなみに最初の5カ国というのは、どちらの国ですか。

南アフリカ、リトアニア、ブータン、ツバル、ブラジルです。もちろん意味があって作りました。南アフリカは、アパルトヘイトを撤廃した国ですし、リトアニアは杉原千畝さんがいた国です。ブータンは、おそらくチベット仏教の唯一の国で、呉服の「ゴ」という語源になった民族衣装をお持ちです。ツバルは、海面上昇により海に沈まないか懸念があり、環境問題を一応僕もかじった人間として、作ってみようと思いました。ブラジルは、日系人がたくさん暮らす国ですし、今、日本の着物に使う絹はブラジルにも支えられていることもありました。

——日本橋で開催されたイマジン・ワンワールドの着物のショーを拝見しましたが、着物の中に相手の国のものを入れるという、和装なんだけれども、何ともいえない、今までにないものを見せていただき、感動しました。

そうなんです。着物には力があるんです。その力というものがいったい何なのかというのを体験してもらえないんですよね。50年後でも子供たちにも着物を見せたい。「当時こういうものがあつたらしいよ」という、要するにヒストリーみたいなものでは

なくて、カルチャーであり続けるためには最低限の作り手とそれを支えるだけの産業としてマーケット、これを残さなきゃいけない。残すためには新しいファンも増やさなきゃいけないし、新しい作り手も供給していく。

これを経済的に解決するために、やはり1回皆さんが「えっ」というようなこと、「はーっ」というようなことをやっぱりやらないと。それがインパクトであり、その背景には、公益性がないとお金は出していないだけない。それを全部僕の中で解決できる理屈であり仕組みであるのが、このイマジン・ワンワールドという形に今なっていると思います。

——この着物のショーは、ファッションショーなんですけど、最後に高倉さんの呼びかけで、みんなで手を握り合って、みんな1つの世界になりましょうと言うと、みんな素直な気持ちでそれができちゃうのが不思議ですよ。

だからそれを1つの疑似体験みたいにする。目に見えるものは伝えやすく、ビジュアルイメージがとても大事なので、僕としては、まずは国連加盟国や日本と国交がある国が196カ国ほどありますので、その着物すべてを一個ずつきちっと作り上げていて、それを着た人たちで手をつなぐシーンを見せてあげたい。

——インタビュアーの個人的希望ですが、イマジン・ワンワールドの着物の方々に先導していただいて、東京オリンピックの入場式とか閉会式とかで出ただけいたら、参加国の方々にも喜んでいただけるんじゃないかと思うんですが、いかがでしょうか。

東京オリンピックもそうですが、近いところでは、今年5月に予定されているG7北九州エネルギー大臣会合で、主要国の人たちを各国の着物でおもてなしさせていただくことになっています。イマジン・ワンワールドというのは、僕は1つの思想とか理念だと

思っているんで、このような場で、着物というものを通してそれを表現したいなと思っているんです。要は世界を平和にしたい、日本的な和をもって貴しとなすという思想を一番伝えられるのは、僕はやはりカルチャーだと思うんですね。

——製作する着物や帯の予算は決まっているのですか。

一カ国の製作費は、着物、帯、その他諸経費を含め、200万円と決めています。高名な年配の先生方にも、若い先生方にも同じ金額でお願いしています。

今日も、このインタビュー前に、9人の女性染織家の先生方にお会いして、それぞれ担当される国をお願いさせていただきました。

——米国コンセプトの着物（※表紙裏にカラー写真掲載）ですが、着物の柄としては、普通考えられない宇宙飛行士やリンカーン大統領像等が入っていて、高倉さんとアーティストの先生方と、デザインについて綿密に練ったりするのでしょうか。

アメリカは難しかったですね。17世紀か18世紀の世界で、アメリカという国ができたのは非常にショッキングだったんだろうと思います。自由平等なんてあり得ないというのがたぶん当時の貴族階級ですよ。それでもやっぱりどうしても抑え込めなくて、しかもフランスの人たちは応援するわけですよ。だから自由の女神を送るわけですよ。当時の常識からすればありえない、人気投票で決まる大統領というのがやっぱり大事な国なんですよ。だから大統領にもものすごい権限を与えているし。

その大統領の国というのは、じゃあ、何をもって示すかというときに、白頭ワシなわけですよ。あとはアメリカってどこに特徴があるかといえ、州によって個性が認められているところなので、州の花を全部調べて、50州の花をすべて描きいれました。ただ、花だけじゃやっぱりアメリカ人は喜ばないだろうと



50年後の子供たちにも着物を見せたい。ヒストリーではなくて、カルチャーであり続けるためには、作り手とそれを支えるマーケットを残さなければいけない。新しいファンも増やさなければいけない。着物には力があるんです。その力がいったい何なのか体験してもらえないかなと思いますよね。

高倉 慶応

考えて、じゃあ、大統領で誰がというと、やっぱりケネディとリンカーンなわけですよ。リンカーンは銅像がいいですかねと。じゃあ、ケネディはといったときに、アポロ11号を描くこととなりました。それにちょうど今、大使はケネディさんだし喜ぶよねと（笑）。

——いろいろ考えていますね。

最後にやっぱりどうしても僕が入れたかったのがナンバー42です。これはジャッキー・ロビンソンという黒人初のメジャーリーガーの背番号で永久欠番なんです。だからアメリカ人が「42番。おっ、これはジャッキーのことか？」と分かると、「お前は俺たちのことを、よく分かっているな」という顔をするわけですよね。「そうでしょう。分かっています、アメリカ人の心は」というふうに言うと、そこでまた大きな手で握手してもらえます。42番を、わざわざリンカーン大統領の上に置いて、「リンカーン大統領が頑張った。ジャッキー・ロビンソンが頑張った。いろんなことの先に、伝説の42番が生まれたんだよね」という歴史を織り込んでいるという。そういうことを相手に説明するわけです。

——一つ一つのディテールを研究して、相手の国を理解した上で盛り込んでいくわけですね。地道で大変な作業ではないですか。

これまでは、ぼちぼちの製作ペースだったんですが、実はこの6月くらいにはすでに、ちょっと無謀ですけどもう50カ国を発注していると思います。要するにプラス50。今25カ国まで見えたんですね。この秋の10月30日（日）、日本橋でショーをやるので、ぜひスケジュールを空けておいてください。

プロフィール たかくら・よしまさ

1968年、福岡県久留米市出身。蝶屋株式会社の3代目社長。24歳で蝶屋に入社。2000年より公益ひとづくり事業「ミスジャポン」を立ち上げ、2010年より福岡打ち水大作戦へ参加協力し、人づくりや街づくり活動に尽力する。洋楽好きが高じて久留米のコミュニティFM「Dreams FM」やLOVE FMにて音楽番組のパーソナリティを務めた。2014年に一般社団法人イマジン・ワンワールドを発足。